

木村大輔 編

## 6ステップで組み立てる理学療法臨床実習ガイド

臨床推論から症例報告の書き方まで

内山 靖(名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学理学療法学講座・教授)

このたび、『6ステップで組み立てる理学療法臨床実習ガイド—臨床推論から症例報告の書き方まで』が、木村大輔氏を編著者として刊行されました。

本書は、臨床実習を学ぶ際の(1)理学療法技術、(2)自己学習、(3)思考の3つの視点から、臨床実践での理学療法の流れに沿って、学生の行動を6つのステップに分割して整理されたものです。論理的に他者へ説明する手段として、三角ロジックを適用しながら極めて身近な話題を取り上げ、対話形式を交えて、事前準備、目標の抽出、仮説の立案、問題点の抽出と優先順位の決定、治療プログラム立案・実践、効果判定・今後の方針からなる理学療法の流れを解説しています。

2020年4月から理学療法士の養成課程に適用される指定規則は101単位となりますが、そのうちの20単位が臨床実習に配当されていることからその重要性はゆるぎないところです。臨床実習は、その過程でいくばくかの困難や自己への課題と向き合ったとしても、病める対象者の思いと臨床における理学療法士の真剣な眼差しは、学生にとって学内教育では経験できない自己を振り返る機会ともなってきました。多くの学生が、臨床実習を通して見違えるような知識の統合と職業意識ならびに自発的な学習意欲を身につけ、一段と成長した上で卒業していく様子を目の当たりにしています。

臨床実習では、対人関係、これまでの知識の不足を一気に挽回しようとする過剰な学習、有病者に適用できる基本的技能、実践レベルでのコミュニケー

ション能力、周囲のペースやニーズに合わせながらの臨機応変な行動など、新たな学習課題が複合的に関連するために学生や指導者は相応のストレスにさらされています。この解決のために多くの努力が払われていますが、根幹的な課題の一つとして、既存の知識・技術・態度を統合する思考の整理について臨床の流れの中で学習することが重要になります。著者らは、早い段階でこの本質的な課題に気づき、正面から真摯<sup>しんし</sup>に向き合ってきた成果の一端が本書に凝縮されています。完成度の高い内容もさることながら、理学療法に対する熱い思いと学生に対する温かい眼差しをこれほど強く感じさせる書籍は珍しいと思います。著者らは、ロジカルシンキングに関心をもって同じ研究会に所属しているようで、日々の熱い討議が紙面を通じて伝わってきます。

このような書籍に共通したジレンマとして、一定の理解や関心がある人はさらによくわかるようになり、そのための工夫の余地も大きいのですが、一定のレディネスに到達していない人には難解で、何を学ぶかがよくわからない点をいかに乗り越えるのかという課題が横たわります。その点からは、本書は学生とともに、臨床実習指導に携わる関係者にお薦めするものです。また、学生が考えていることや、何がわからないかがわからなくなりつつあるシニアの臨床家や教員にぜひとも推薦したい一冊です。

(B5・頁272 2020年 定価: 本体3,600円+税 [ISBN978-4-260-04134-8] 医学書院刊)